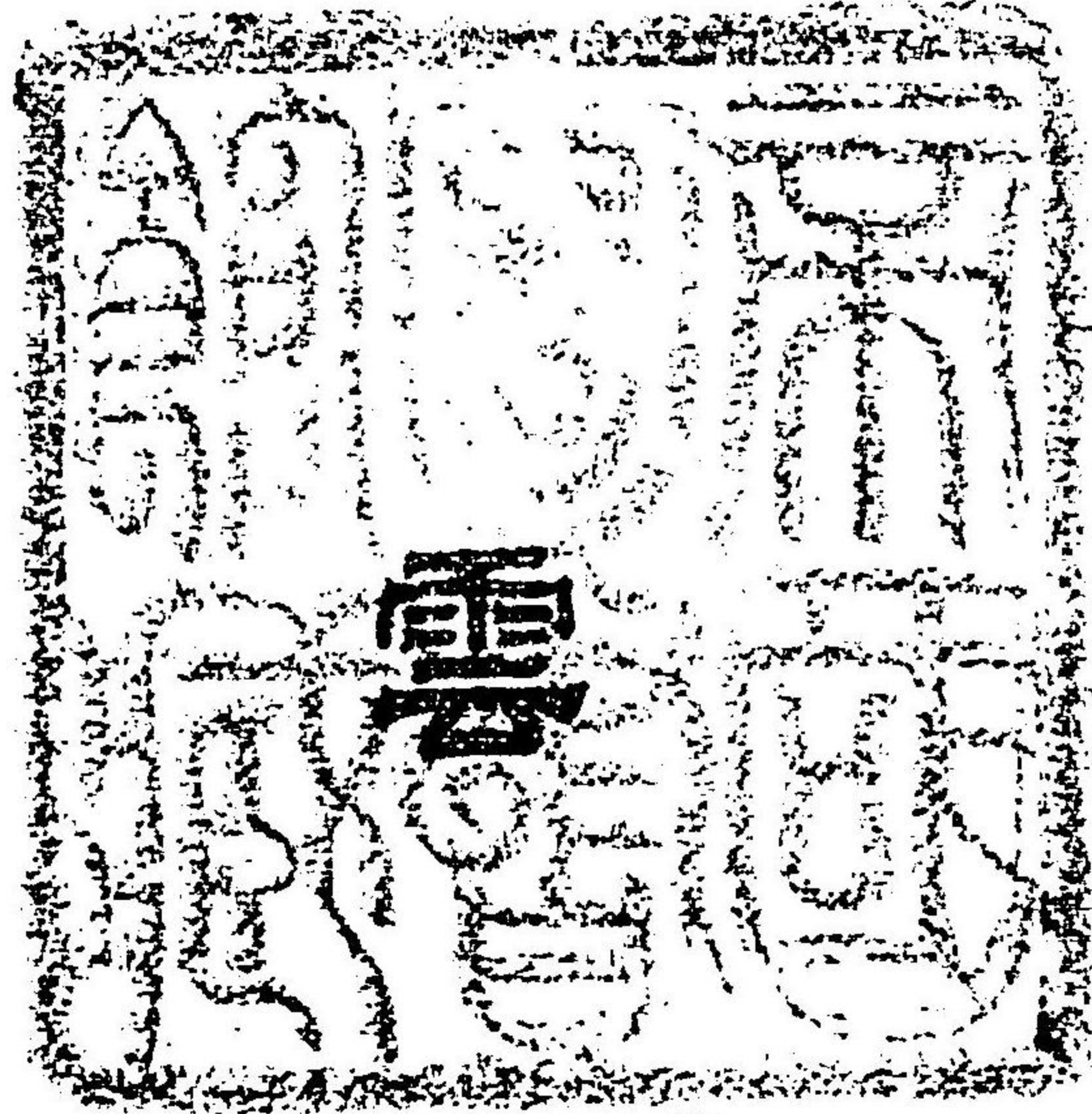


特 61
505



表

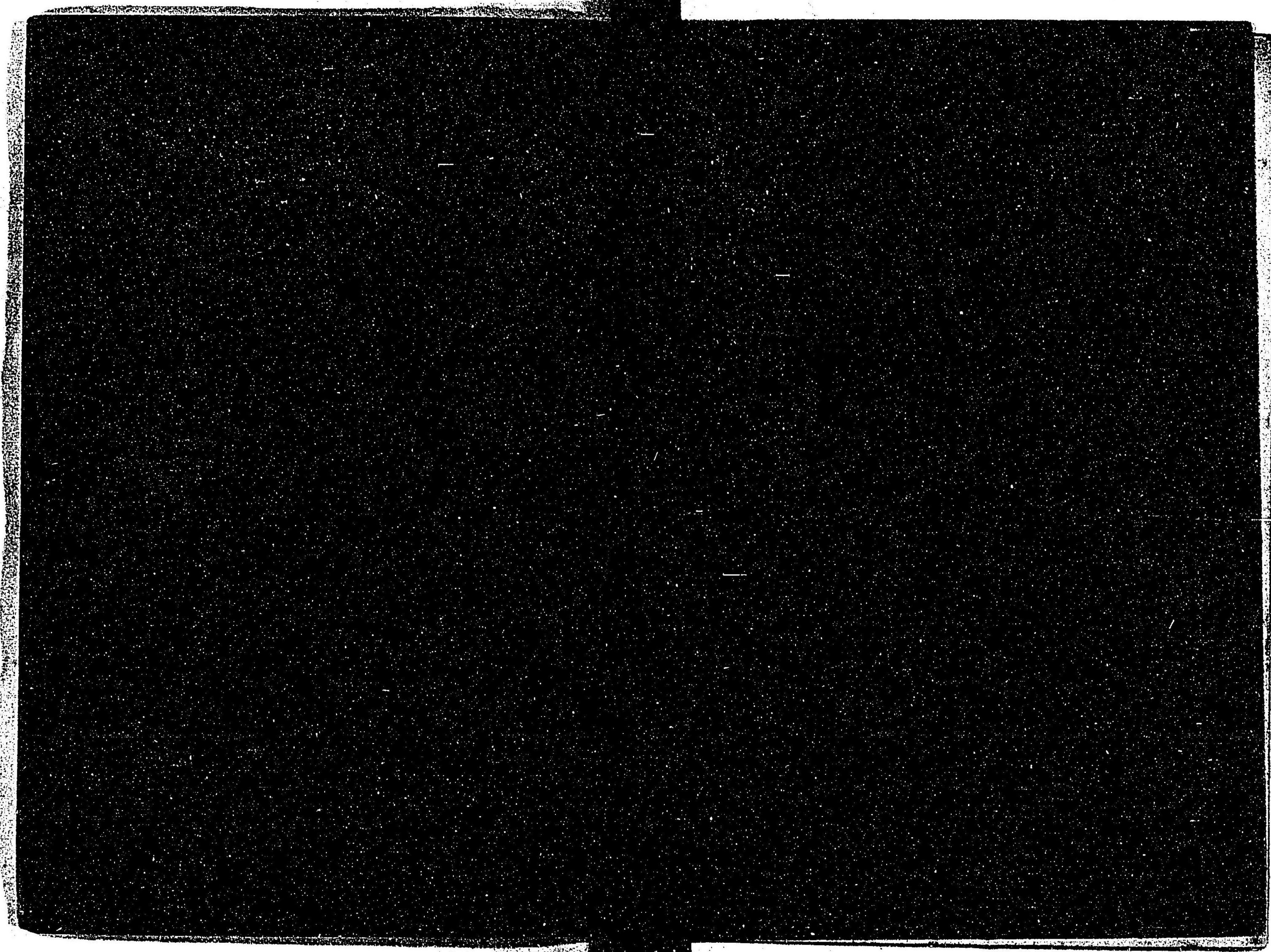


友人某君と語る。

某君曰く、文集を公けにするは、大晦日を過す如しと、僕も亦然りと思ふ、過去を葬る點に於て、一段落を著くる點に於て、新らしき行程に上る點に於て、しかして之を數次する間に、墳墓に入る點に於て、哀しからざるにあらずと雖も、何とも致し方なし、即ち借りて序となす。

明治四十年初夏

著者



一本書は山岳の旅行記なるを以て『雲表』と題しぬ、山岳ならぬ『相模野』を加へたるは、單調を避けんと欲してなり。

一本書に挿入せる寫眞の中、兼岳及び槍ヶ岳雪田の二葉は、長野中學校教授志村寛氏の撮影寄贈せられたるもの、又繪圖二葉は、丸山曉齋中澤弘光兩畫伯を頼らばしたり、共に厚意を謝す。

"Let him spend his time no more at home,

Which would be great impeachment to his age

In having known no travel in his youth."

Shakespeare.



この文よ

三たび足たすなりたる筑波根詩人の枕頭
に侍りて我が踏るの旅がたりにしはしなり
ともわづらひ多き君を慰めよとて

横瀬夜雨君に獻ず



目次

影不二を觀る記

相模野

冬の淺間山

日本アルプスの南半

(一) 信州に入る記

(二) 日本アルプス連嶺を觀する記

(三) 北穂高の高原

次目

次目

(四) 常念岳に登る記

中房温泉の記

燕岳及大天井岳に登る記

奥常念岳の絶巔に立つ記

梓川の上流

以上八篇十一章

目次終

雲表

影不二を観る記

小島鳥水

影不二を観る記

彫刻師の刀と、畫家の刷毛と、幾何學者の定規とが引くことを夢想せざる、秘密の線を、天の一方に現することあり、影不二是れなり、雪を冠りたる不二の影の、田子の浦や、浮島沼に倒寫され

影不二を觀る記

たるものは、皺皺鮮やかに、透明に過ぐ、影不二は
虚空の紙障に、色なく、熱なく、印焼せられたる幻
像なり、淡々として、無きが如く、有るが如く無限
に隣座す、人の土足に踏み汚されたる不二を再
現的に、瞬間的に、純化して、帳は高し、神手にあら
ずんば之を颺げ得ず、不二に登りて影不二を見
ずんば、真個不二の「奥の院」に詣でたりと言ふ可
らず。

影不二を觀る記

「神が其伎倆見する日選は曆に記されず」泣蓮
故に十たび不二に登りて、見るを得ざるものあり、
初て登りて見たるものあり、影不二の現はる
は朝と夕、天地を兩分して、上半淨明、下半は混
沌として、水蒸氣の濃密をきはめたる時にあり、
朝は日東に出づるため、影不二は西の方、精進湖
上に現はれ、夕は西に落暉するを以て、東方函根
不二の間、御殿場の裾合谷邊に立脚するを常と

記る觀を二不影

の沈澱層を通過して、初めて不二に參するなり、
白衣、金剛杖、笠、鈴、石華表、雜然譁然として賑やか
なれど、吾が大畫家、自然は自家の卓子の抽出に
これらのガラクマ道具を收めて、有用の手の觸
るゝを俟つ、刑部是れ余の宿舎なりには、登山客
二階の上下に踟躕するばかりに雜踏せり、余と
同室の客は、書生二人、商人一人、丸山講の先達一
人、この日雲低く垂れて、不二を見ず、夢と霧と互

記る觀を二不影

に窓の戸に懸りて、味爽に及ぶ。
同室より同行三人を募りて發す、淺間神社に
入りて先づ潜る、三國第一山の額、念佛の行者の
如く踞する、石燈籠の背に、寄進者の名を刻す、享
和何年——人生はいかに短きぞ、人は一度より
活くる能はず、そゝり立つ神杉の梢無限を握ま
むとするも、一片の雲行くところに行き止まる
ところに止まるの自在に若かず、況して息苦し

記る観を二不影

き大氣の上に挺ん出る永劫の半身像をや、あま
りに弱き人間を以て、その脚下に跪ついで對比
せしむ、自然も亦俳優性あり。

神社を出て裾野に入る、馬に乗る人(馬牽くは
乙女多し)底浅き馬車に足投げ出す人、喧噪市の
如きところを後にして、爪先上りとなる、上吉田
の銅鳥居より、中の茶屋まで一里半、馬返しまで
又一里半と稱す、太郎坊はこの口になし、ふりさ

記る観を二不影

け見れば、河口湖は垂乳まるの隠れの玉を、煙る
が如き緑蕪の中に磨き出で、十二岳や御飯峠や、
亂山怪しきまでにインヂゴ一を加味したる立
髪を被ふりて、大荒より下り来る、緑野に遠く引
く一線の路、之を挟んで兀立せる火山岩塊は往
にし熱苦るしき吐息を草いされと共に吹き返
へして行人を壓す馬返しに到りて、初めて唐松
を見る。

影不を二観る記

上ること二三丁にして、一合目二合目には金剛杖に印し、十八世紀式の繪圖を嚮げり、一合より三四合の間皆所謂木山にして、唐松の梢槍の如く蒲の穂綿より厚き雲を貫ぬき、灰青色の紐その蛭巻に長く垂れたるは、松蘿なり、四合目は已に海拔五千八百尺、振鈴の聲は無音の谷を漂泊して上になり、近くなり、下になり、遠くなり、人は螺旋的に鈍歩し、霧は銀湍を噴いて、蒸地

影不を二観る記

に直前す、天地の境といふ五合目に到るや、冷たき皮流となりて、飛ぶこと迅く木を洗ひ、草を洗ひ、下界に萬鈞の壓力を加へて、粒々皆飛鏃となる、撓みなき弓勢や、しかも一たび小御嶽に出づれば、無限大の傘破れて、突兀たる不二の胸部以上を躍らす、一天清淨にして、渾べての物皆明かるし、左折して經ヶ岳に上り、ミヤマハンノキや、白樺や、紅紫曉星の如く疎らに閃めける草本帯

彫不を觀る記

刻一刻に凝結し緊縮し、茫々として又茫々たる
歪板面の、その東極限は一大堤防の如く堆起す、
小舎の人、雲の土堤が高いと嘆ず、銀の土堤と不
二の赭岩を以て、東西の岸を劃り、雲海此間に防
遏せられて、沈黙死せるが如し、天もし雨を下せ
ば、鏡面を弾く銀珠となるべく、月を上せば固形
の無限を以て、流動の無限と反照すべし、こゝに
現在の記號を存せず、こゝなる自然は、大なる想

彫不を觀る記

像の秘密その物にあらずや、白しと雖も、空白に
あらず、廣しと雖ども、虚曠にあらず、かゝる時、か
ゝる境地は神がその手術を見するに適せり。
倏ち見る、混沌の中、淡々として走り來るもの
あり、走ると謂はむより、落とし來るなり、あらず、爰
られたるなり、或人の所謂幾何學者の夢——怪
しき線横はる。
爛々たる日は、白山ヶ岳を跨いで、西に傾き、不

影不を二観る記

二は雲に倒生寫され、雲は不二を透影寫す、明白に輪廓と言はれ得るほどの物、二條、不二を寝かしたるやうに、脚下の氷海にふはりと落つ、これを線と謂はむは、あまりに知に過ぐ、光と謂はむあまりにおぼろなり、只だ水の如き刀痕音なく、乾面に生ずと言は、或は可ならむ。

日愈よ不二の背に沈めば、氷海の土堤に頭を載せて晏臥したる、這個無文の尖塔は、遽々然と

影不を二観る記

して起き上る、日落つること一寸なれば、丈高きこと十丈、何物のサムソンが、之を揺かす、北の方七合目邊より一線を天に向けて投げかけ、南の方成就ヶ岳附近に一線を落す、頭は次第に仰向き、土堤を突破するとき、白菊の瓣を寸々に裂き亂せる如き厚雲、鶏冠立す時に六時二十五分、鮮やかにピラミッド形をなすに至れる、仄線は、綱に錨する如く、硬角度を以て、虚無より虚無

記る觀を二不影

に引き、先づ不二と對立の姿靜を整へ頭を八合目邊まで擡げ、石灰岩畔の冷湖の如き雲の水を底より浴びて兀立す、田子の浦の水、浮島沼の水を、地平線上よりすくひ上げて、雙肩に注ぎたるにあらざるか、時に六時四十分。

日愈よ西するに隨ひて、第二の不二は、次第に南に玉座を遷す、頭も漸く尖銳、我を距ること幾百尺、現世の線と、未來世の線と、現像と幻影と相

記る觀を二不影

觸れむとして、是は硬きこと鐵の如く、彼は柔冷なる腐蝕線を引いて、氷冷の雲と輪廓の區別を嚴にす、氷濤兩個一萬尺の大絶壁間を漲ぎり明晝の如き吾山を殘して夕の如く、謎の如く、夢の如く、神秘の如き靈の記號倏ち亡し、その消ゆるや回轉燈の微白光の如く、眞に瞬間的なり。わが赤裸々なる不二は、俄に少年の俤を失ひ、隱者の如く、膝を抱いて肅然銷魂の淵に臨む。

影不を二観る記

淵には、二筋三筋霧の小流のせゝらゝを見る
のみ茫然。

参照著「不二山」——霧の不二、月の不二、雲の不二、日の不二。

相模野

(一)

相模野

ツルゲネツフを譯した二葉亭氏の「あひびき」
は、國木田獨歩氏をして「武藏野」の活きたスケツ
チを描かしめ、獨歩氏の「武藏野」は、自分に教へ
て、こゝに相模野の至つて漠然とした圖案を組
み立たせるやうになつた。自分の生れ故郷は遙
か南の國であるが、幼年から武藏野の一部に住

野模相

まつて、尾花より現はれて尾花に隠れたといふ月の光線を浴び、その尾花の刈られた痕に久しく呼吸をしてゐた反動か、山の方が至つて好きになつたのである、これは信州の山岳國に誕生した反動であるわけか、武藏野が好きで、好きで、堪まらなく好きだといふ吉江孤雁氏とは、對角線的に相反してゐる、自分は今猶山を除いて、地上に光榮があらうともおもつてゐない、併し元

野模相

々と肩を聳やかして、風を截つてゐる山も好いが、エマールソンの所謂「余は雑物の犠牲なり」といつた風の平原にも味ひがある、とおもひ出したのは此頃の事で、あひびきの文章が獨歩氏を助けた如く、獨歩氏の文章は、自分を助けてゐる。武藏野のやうに活氣の充溢した尾花の波うつ聲にも、楢の葉の唄さにも、百姓の鍬の閃めきにも、村外れの鍛冶屋の太い腕にも、精力が迸し

野模相

るやうに思はれる、若々しい、生命の漲つてゐる、希望の多い平原から見ると、信州の高原も、飛驒の高山も、忘却せられたる自然になつてしまふ、氷壺のやうな雪の中に藏つてゐる山は、玻璃國の中の過去帳である、武藏野はさうでない、木一本も個々に特立あり、丘一段も別々の特色がある、自分がこゝに描かうといふ相模野は人間の劃つた地理から言へば、讀んで字の如く、武藏

野模相

野と無關係のやうであるが、自然地理の上からは、明かに武藏野の輪廓の一部を成してゐる、變化の法則は、武藏野の一角を割いて、必ずしも武藏野に肖ることなき相模野を與へた。自分がかつて平原論一篇を作つて、その中武藏野に道ひ及ぼしたことがある、未だ公けにはしないが、順序上、こゝにその一節を引きたい。「飛ぶものは雲ばかりなり、石の上」芭蕉と哦は

野模相

れたる那須野は悲壯なり、同じく吹き飛ばす石も淺間の野分かなの句あらしむるに至りたる淺間山下の追分ヶ原は、跌宕なり、然れどもこの種の高原は、同時に狹隘にして、山岳化せられたるが故に、人性に乏し、關東平原や、信濃川平原や、濃美平原や、畿内平原に至りては、同化作用の充ち満ちたるものあり、人の呼吸と自然の呼吸と互ひに吞吐す、殊に武藏野に至りては、平原より

野模相

衝巷となりたる東京本市を除き、目白、目黒、白金等、今猶武藏野の係を留むと稱せられたるところは、人と自然の接觸線を、輪狀に刻みたる如く、この線を出入するものは、人間の力と、自然の權と、相争ふが如くなれど、まことは歴史を築く人間と、人間を殖うる平原と親和の圈内なり、自然を偏愛するものは、平原を以て「事業の國」として卑しめど、東京は死したる平原にして、武藏野は

野模相

將さに活きむとする都會なり。人始めて平原に下りしとき、彼は、一個の卑しき蜂に過ぎざりしも、平原の温情は、能く人を融和せり、彼は山岳の如く魔力を以て命令的に人に對せざりしかど、我より迎へて人に適合せり、自然は超高の傍ら、人と交はらざる可らず、この使命を帯びたるものは、平原にして、この種の平原の代表者として、武藏野を擧ぐるを、誰か否み得む、那須や淺間の

野模相

落木赭岩が、秋風に愁ひ、失神したる如くなりて、骨立踰跟するところは、いたく悲壯なるものから、武藏野の現今は、さる荒蕩淡岩の時代を離れ、今や自然と人間と、家族的團練を見るに至れり、武藏野は最も人間らしき意味に於て、生命的なり、一層踏歩して今や *Home of Life* となれり、このなる草木は、人間と同じく境遇の造物となりて、放恣的に生ひず、よしや淺薄なる雜情の發生に似

野模相

たる雑草はありとするも、風吹けば小歌して人を慰め、土を舐めて甘しと言ひたる原人の子孫に、芋や大根や、或は諸の美味なる果實を供し、戸外には四時永劫を私語する流水あり、百花こゝに咲きて、天上の星の如く、文人の印譜の如く、その色彩は美人の顔料よりも、美はしく、人は直立線に歩み、杉は直立線に立ち、地はともかくも水平線に延び、蛇は水平線に横はり、この兩々線の

野模相

間、九十度の直角を作して、萬象その間に介在す、こゝにあるもの草木も亦人情化せらる、人間の四肢の如き木、農夫の腕の如く、節くれ立ちたる枝幹は支撐の美を作り、頭上を壓する大空にも、肘を突く烈風にも、その他いかなる重力にも、悍然抵抗して倒れず、こゝに堅固なる安心を示し、その下の田疇は、直線に劃せられて、比例の整然たるは、秩序正しき人間と自然の合力なるを想

野模相

はしむ。(日本地理美観の一節)
以上が自分の武藏野観で大體は獨歩氏の「其特點を言へば、大都會の生活の名残と、田舎の生活の餘波とが、こゝで落ち合つて、緩やかにうづを巻いてゐるといふ以外に、自分ながら多くの肉を被せ得たものとも、おもはれない。
併し相模野となると、大に同じところがあると同時に、大に違ふところがある、武藏野の自然

野模相

を愛し、且つ描かるゝ孤雁氏は立川で、汽車を乗り換え、八王子驛で降り、相州街道を傳はりて、塙相原溝などの諸村から、馬入川の岸へ出で、厚木の町から、平塚の海岸へ向ふのも、興味がある、右方に大山、塔ヶ岳、丹澤山などの一帯の山脈が、蜿蜒續いてゐるのを眺め、左方は稻田が遠く開け、穰々たる秋の實りの豊かなのを楽しみながら、一路坦々、十里の行程一日に達する事が出来る、

野模相

併し此邊は既に武藏野プロバアの境界を脱してゐると言はれた無論獨歩氏も武藏野の範圍外に措いたところに我が相模野が存するので或人間と或自然の接觸線を武藏野とすれば武藏野の外れと相模の山の起りと交綫するところ相模野で那須野などは山岳性と平原性はあるが人間性には至つて鹽辛いところだ武藏野は平原性と人間性とはあるが八王子や青梅

野模相

を武藏野に編入せぬ限り山岳性は切れてゐる併してには山岳性と平原性と人間性との三つが鼎足してゐるその第一には紫の大山が額を壓すばかりに立つてゐる第二には武藏野から流れて來た尾花の波が切れくゝに蜿ねり楯林の赭い焰が飛び々に燃え残つてゐる第三には鎌倉覇府の興亡史が一石一木にも描かれてゐることは武藏野の比でない武藏野が關入

相模野

州の一部に呼吸してゐるとすれば、相模野の一角には、關八州が呼吸してゐるといひたい、武藏野は關東平原の引き締まつた縮圖であるが、相模野は、武藏野より平面が小さくて、斷面的に厚いところがある。

(三)

さらば、相模野とは何處を指すのであるか、これは立派に地理上の名稱となつてゐるが、知る

人は稀である。自分が初めて「相模野」なる名を知つたのは、新篇相模風土記稿卷の五十九の左の一文である。

相模野 郡座郡高の中程より北端に及ぶ迄

一圓の曠野なり、東西一里半に餘り、南北五里餘、過半草莽に屬し、小松など生せし所あり、野の形狀を概して言はば、東方上溝村と、西方上矢部新田村の間、殊に狹まり、經凡二

相模野

野模相

百間土人此所をひくのろと呼宛も瓢の如し、四邊の村々は己が村名を以て接する所の野に名つく、鶴間野、相原野の類、これなり、北條氏の頃も、此例ありしこと、當麻無量光寺所藏、北條氏の文書に見えたり、今この邊の秣を刈取り、御料私領各野永を貢す、往古の様を考るに、此邊より南分は、總て原野にして、鎌倉將軍の頃大庭野など稱せしも、こ

野模相

の野に續きて、國中第一の曠野たるを以て、相模野の名は負しならん、今も此邊數村に秣野多くあるも、皆原野の開墾せし村々なれば、かく空閑の地多きなるべし、されば往古は、東西の邊に村落をなし、其他は大抵原野なりしと見えたり、もとより土地高く平坦にして、水利不便なれば、當時よりや、開闢すと雖、猶曠野草莽の地多く、今も年々開

野模相

壘の舉止まらず。

更に興味を惹いたのは添えてある地圖で、この地圖が阿非利加のサハラの大沙漠もかくやとばかり、大輪廓を施して描かれてある。

武藏野といひ、目黒、白金、澁谷といへば、東京を知る人は誰も知る、相模野は弘く知られないだけ、一通り線を引いて説明して見ねばならぬ、即ち武藏野が東に荒川、西に多摩川の太い硬い二

野模相

線を力強く引いてゐるやうに相模野は東に境川、西は馬入川に挟まれてゐる、境川といふのは、圖にもある通り、武州と相州との境を流れる川であるが、細い川で、荒川の十分の一も先づ覺束ない、鉛筆尻のゴムでも摺り消えさうだ、それだけ武州多摩郡の武藏野の極端と、密接な關係を以て、我心は川にわらず、分つ可らずと澄ましてゐるやうだ。此二川の間でも、南方海に瀕したと

野模相

ころは、鶴見や、川崎が、武藏野と言ふに躊躇せらるゝ如く、相模野とは言へない。こゝは、芝まとも葛のしげみに妻こめて砥上ヶ原に牝鹿鳴くなりなど、西行物語に見えた砥上ヶ原で東西三里、南北十町ほどあろうが、今の鶴沼や、茅ヶ崎の在るところがそれで、海水浴旅館が何軒もあり、市川團十郎の別荘もあり、川上音二郎の俳優學校敷地もあり、お負けに炮術練習場まである

野模相

から相模野といふ寂びた感じはない。二川に擁せられて海に入るまでの土地の半から北、即ち多摩川、二子の渡しを渡つて大山街道へ突きかけ、幅潤の一本道を下、鶴間へ出で、厚木に到るまでより北を、純粹の相模野プロバアともいふべく、下鶴間よりや、南に下つて、武州下川井邊から、二つ橋上和田、本家川、深谷から用田に到り、北に振り向いて、前記二川の間へ、鋺を

野模相

宛てがつたやうに柄元廣く尖先狭く割り込ん
だ高臺を總稱して相模野と一概に言つた方が
宜かるう。この相模野と、その外廓の間には吉岡
野がある、神奈川文庫に

吉岡野は緩瀬村大字、吉岡の東南にあり東西
二町許南北十六町程あり、古の相模野の内に
して、今之を葛原野と呼び、澁谷村に接續して、
頗る曠漠なり。

野模相

とあるが、今猶依然昔の條を止めてゐる、東京の
日本橋から相模野まで、東海道を通過しても僅
に十五里である。相模野の所在は、高座郡である
今はカウザと音讀してゐるが、昔は高倉郡とい
つたさうであるから、タカクテと訓だ方が、その
意味からしても、どんなに趣味が多いか知れな
い。こゝには大山が聳え、その下に相模野が一段
高く横はつてゐるのだもの、タカクテでなくて

野模相

はならぬ。高座郡は南から北に亘つて九里もあ
るが、その内、南の東海道が貫いてゐる三里許は、
前にも言つた通り、低くて、夷らかで、砂地が多く
て、相模野とは言へないが、北へと段々に高くな
つて、武藏野の極端と接する邊が、土地が同じく
平らかでも、高くなつて、那須野の土と、武藏野の
草木とを混合したものを、丹澤山脈から吐き出
す雲を覆つ冠せて、高原的に空気を冷たくして

ゐる。

野模相

相模野と武藏野と、大に同じきところがある
と、前に言つた、もし關東の大平原を、利根川の兩
岸にまで廓大して、常陸の女化原、下總の小金原、
習志野、それから東京の所謂武藏野を、この間に
含むとすれば、相模野も無論、同列の一座を占め
得るもので、方三四十里に亘つた大平原の極西
に屏息してゐる、もし武藏野の一部に入れて考

野模相

へるとすると、相模野を起點として武藏の多摩郡に到り、今の所謂武藏野を包みて、鴻の臺や真間に至るまで、東京の山の手と同じやうに高臺をなしてゐる。武藏野の範圍から、東京市を除いて、町外れの澁谷、道玄坂、目黒の行人阪、新宿、白金と線を手繰つて行く手心は、相模野をも地形上から感情上は別として、どうして別にすることが出来やう。地質學者の術語を借りて言へば、こ

野模相

れら第四紀層のうち、東京の下町から品川、崎神奈川は、東海道、藤澤、平塚が新層で、武藏野より相模野に到るまでの山の手は、同一の古層を延ばしてゐるのだ。切つても切れぬ血縁である。されば武藏野の大動脈なる多摩川に臨んでゐる。百草や關戸のやうな武藏野的丘陵は、馬入川を俯瞰してゐる相模野の丘陵と瓜二つである。相模の國は馬入川といふ刀の如き谷流で

野模相

東西の二つに割られてゐるが、西は山の國であつて、平原の國ではない、東は平原の國で又人の國であるが、併し馬入川に接した地から真東を指さし、武藏に連なつたところのみが、高臺で尾花や楢の殖民地で、人間の尖兵が少數を派出せられてゐるだけである、こゝに武藏野と相模野の兄弟が並んでゐる。

それから又似てゐるのは、武藏野から秩父山

野模相

脈を望んだ光景と、相模野から丹澤山脈を仰ぐ點である、見たまへ、馬入川の下流から、正北に向ひ、多少の出入はあるにしても、殆んど一直線に武藏野の縁を通りぬけ、荒川が呱呱の聲を擧げるところまで突つ走つてゐる、一文字状の行儀のよい山を、是れ關東平原の西に一連の屏風を立てたもので、その山の麓には、相模で言へば大山附近、武藏では秩父附近のやうに、第三紀の丘

野模相

陵が寢てゐるが、その丘陵の下に展べられた平原、これが武蔵野と相模野とで、同脈の山の底の下に護られてゐるのであるから、こゝで仰ぎ視た丹澤や、秩父の山が、荒削りの鬼面を剥ぎ出して、平原の自然を威嚇してゐるところまでが、どのくらゐ似てゐるだらう。しかしこの兩方の山は、どつちも圓味を持つて、樹が埋まるやうに多くて、高さも似たり、寄つたり、その代表的に雄大

野模相

なるものが、二千米突(秩父の大雲取)一千五百米突(丹澤の尊佛山)といふところで甚だしく不揃ひならぬ、塙を結び繞ぐらしである。故ありてか偶然か知らぬが、地名もおもしろく、武蔵野と似てゐる、相模野附近に、澁谷といふ地がある、綾瀬といふがある、相模野の南端に、蓼川といふのもある、これは「風土記」に據ると正保頃までは立川と言つたものだから、多摩川岸

野模相

の、それと似てゐるのみならず、和田といふのは、多摩川の日向和田に縁が無いでも無い、深谷といふのもある、四谷(座間村)といふ小字がある、國分と言つて相模野つづきの馬入川附近に、國分寺の在る村がある(尤とも國分寺はどこにもあるが、武藏と相模の國分寺は互ひに、多摩川や馬入川から、一里以内の距離にあるのが似てゐるといふのだ)相模野から下つて、下町となると、

野模相

新宿がある、堀の内がある、これは偶然にもせよ、有意にもせよ、只だ荒涼なる平原的といふ點が、共通してゐると言ふに留めて置かうか。
かくの如くして、緒の一端を武藏野に結ばれた相模野の大體だけは、略ぼ描けたわけであるが、自分の目的は地理を説くのではなくて、相模野の自然を描くにあるのだ。

野模相

十月七日。

この日は今年(三十九年)になつて、武藏野が、は
じめて獲た秋晴壁の如き日である。曠茫とした
平原の乾面が、どのくらゐ念を入れて磨かれて
あるかを知らうとおもふなら、高臺に登つて秩
父や大山連山を仰ぐに限る。御覽せよ朝起きた
眼が冷水を注されたやうに、俄に醒めるのは、こ
れらの山が濃い結硬色をして、虚空の澄水を切

野模相

つて、トツプリと底に塊まつてゐるときである。
山の色の濃いだけそれだけ武藏野の秋色は鮮
やかに光を放つてゐるに相違ない。山の色は晴
雨計の代りになるといふが、山又山の中で、観る
山よりも、平原の山が最も然うである。

自分の居を占めてゐる山王山から高臺を下
りて、程ヶ谷の古驛を、脚下に瞰るとき、大山連山
を仰いでかう思つた、山の輪廓と、空氣の接線と

野模相

かうまで透明白々地に、判然するものか、自らなる工夫畫であつて、別々に取り外すことも出来れば、素の通り、継ぎ合せることも自在であるやうに見えるのは、秋だ、それに四日ばかり前に、不二の雪が二合目まで冠せて来たとおつたが、大山の左の肩に、不二が見える、どこぞの雪の國で、烈しい風が、雪を吹き捲くつて、見る々々堆積したのがそれかとおもふ、このくらゐ雪の白さが、

野模相

目立つほどの空だから、玻璃のやうに澄み切つてゐる、朝立ちの自分の息吹でも、倏ち空に、曇翳が出来るかとおもふと、氣味がよくないほどの、冴え方だ、程々谷の紡績會社の烟突から噴き出す煙が圓くなつて、ふはり〜と飛ぶ、雲だか煙だか解らない、白さが煙かとおもはれるが、淡いから雲かとおもふ、空に吸ひ込まれて消えた後は、一面のヒィも入らないコバルトで、どここの

野模相

隙間に潜りこんだのか、解らない。水には分子があるといふが、行き抜けの空には何がある、野を往き來してゐる人物の輪廓までが、カッキリして、太い線を引かなくては寫せまいとおもふ。自分が相模野を彷徨つたのは、この日であつた。先づ程ヶ谷に入らうとすると、帷子川の水が漫々として張り切れるほどだが、溢るまでには至らないで、岸と殆んど平行して、鰻で均らされ

野模相

たやうに、静まりかへつてゐる。之に一尺を加ふれば暴一尺を減すれば燥、その中心を行つてゐる多摩川の小さいのといふより利根川の至つて狭い餘がある。これは、さすがに未だ武藏野や相模野に踏み入らない前の川だと、領づかれる、爽やかに澄んで、瘦せてゐる。ちよろ々々水も、秋に調和するが、濁つて、皺を寄せて、意地の悪るい姑のやうに、だぶ々々叱言を言つて行く水も、

野模相

隙間に潜りこんだのか、解らない、水には分子があるといふが、行き抜けの空には何がある、野を往き來してゐる人物の輪廓までが、カツキリして、太い線を引かなくては寫せまいとおもふ。
自分が相模野を彷徨つたのは、この日であつた、先づ程ヶ谷に入らうとすると帷子川の水が漫々として張り切れるほどだが、溢るまでには至らないで、岸と殆んど平行して、鰻で均らされ

野模相

たやうに、静まりかへつてゐる、之に一尺を加ふれば暴、一尺を減すれば燥、その中心を行つてゐる、多摩川の小さいのといふより利根川の至つて狭い條がある、これはさすがに未だ武藏野や相模野に踏み入らない前の川だと、領づかれる、爽やかに澄んで、瘦せてゐる、ちよん々々水も、秋に調和するが、濁つて、皺を寄せて、意地の悪るい姑のやうに、だぶ々々叱言を言つて行く水も、

野模相

秋の感じを起させないとは言はない、武藏野や相模野を流れる水は無論後者であつて、白葉鐵を張つたやうに、薄ッぺらに光らない代り、濼くて、厚味がある、この濼いといふ色が、武藏野の八方に行き亘つてゐることを忘れてはならない。程ヶ谷在の紡績會社の前を過ぎる頃より、路は我知らず、高くなつてゆく、爪先上りといつては、猶顯著に過ぐる、只だ心もち、高くなるのだ、人

野模相

間のかけた鉋にしては、先づ上出來の方だ、阪もあるが、七八歩も上ると又平地だ、両方には、小さい丘が迫つて居る、武藏野にも、丘陵は多い、否丘陵の無い處は無いが、併し丘陵との間は概して廣くて、その丘陵を踰ゆれば、更に大平原が眼下に展開されてゐるらしく感じる、併しこの邊になると、丘陵が鼻ッ先に迫つて來て、之に登れば、大山が眉を蹴らうとしてゐるから、もう丘陵か

野模相

ら直ぐ山に連なるのでは無いかとおもはれる。
武藏野の袖口は相模野近くまで来て、俄に寸法
が詰まつて来たのは争はれない。
上川井まで来ると、八王字街道は、北を指して
ゐる、荷車や人力車の齒で、大分擦れてゐるから、
緩だらかな凸凹はあるが、歩いて心持のよい道
だ、今まで細い徑をこの本街道に即かず離れず、
来た人々は、こゝに至つて、大汐に捲き込まれる

野模相

雑魚のやうに、皆この街道に引き寄せられない
ものは無い、無論自分もその一人だ。
繰り返へして言ふが、完璧の秋日である、農家
の側の桐の廣葉は、蝕ひだらけて、針の空から、絲
でも扱くやうに、日の金線が閃めいて、大地をす
かしく刺してゐる、電線一條、銀色を放つて、茫々
として又茫々たる蒼穹を一直線に走つてゐる、
蜘蛛の巣までが、絹糸を絡んだやうに白く光つ

野模相

て未だ穂の赤い芒から芒へと懸け渡してゐる、
宇宙皆光に充ち満ちてゐるから、物皆その半面
に、蔭を宿してゐないのはない自分はずい粗忽
して窄袴の釦を落したたが、その釦が、大地をコロ
くと影と二人で、圓い圈を描いて跛の競争の
やうに、轉がつて行くのがどんなに滑稽であつ
たらう。

程ヶ谷から下川井まで、一里下川井から上川

井まで半里、この間約三十町にして、車一臺とい
ふ割合、幌馬車一臺無い、車一臺は、この邊から相
模野に至るまでの交通機關の大役を務めてゐ
る、武藏野の活氣は、どうやら少しく冷たくなり
かけて來た。

野模相

上川井の手前で、柿の木が二三十本路の兩側
に並んでゐる、百姓家がある、その丹塗の葉の、ハ
サリと落ちて來る木の下に、蓆を布いて、いたい

野模相

けな十二三の女の子が、四五人寄つて、髪結びの真似を仕合つてゐたのが、どんなに可愛かつたらう。

茅膏の小茶屋に蒟栗を賣つて居る、二銭がとこ買へば可なり大きなのが、兩の掌に溢れるばかりある、同じ秋に、醉茗君と二人して、小金井の土堤で、櫻の乾葉を踏みながら、鹽煎餅を噛ちつて歩いたことが、あつたが、武蔵野旅行は、どうも

野模相

栗を食ふのが、一番似合つた趣味だとおもう。もう上川井まで來ると、相模野プロバアの下鶴間に近いこととて、箱根の二子山や、駒ヶ嶽が、小さく見え、大山が近いだけに、獨りで幅を利かせて、瘤だらけの胸を突き出してゐる、不二山は八合目から、上だけを切り去つて、大山に蓋をしたやうで、熟く見ると、錯視とでもいふのか、大山と一つになつてしまふ、もし不二山といふ山

野模相

の存在を知らないうで見たら、大山の罅を雪の
白布で厚く被せてゐるやうに見える、武藏野か
らは、突兀、孤聳の不二を見ることが多いが相模
野近くなると、不二が低く見える、或は見ること
が少ない、已に相模野となつては、愈々近くして
愈々見にくい、或は全く見えない、街道は桑畑薩
摩芋の畑、ツイキ畑等で挟まれてゐるが、稻や栗
の林の多いのは、さすがに武藏野の儔を未だ存

して居る。

それに桑畑を通して、秩父の蜿蜒としてゐる
山を仰ぐと、山が急に高くなつて、桔梗ヶ原から、
飛驒境の一萬尺を眺めた時の感じがするが、桑
畑が水平線下に沈んで、自分の丈が何よりも高
い街道に出ると、山の全容が見えると同時に山
が俄に低くなつて了うから、をかしい。

これから長津田の辻へ入り、又十町ばかりで、

野模相

野模相

町屋の役場から左へ折れこみ、中和田、矢口、鶴の森、淵野邊と行くと、相模野の真中央へ出られるのだが、自分には路を急いだため、町屋の役場前を疾く知らぬ間に通り過ぎ、後戻りがいやごに、金森から原町田へ出てしまつた。原町田は賑やかな宿だ、併し自分は、大分人家が續いてゐるわいと思つただけで、無頓着に素通りをしてしまつた。その中で目に注いたのが、この町唯一の活版

野模相

屋の看板に「武藏野活版所」！
間違ひ次手に相模野の縁を遙かに北へと迂廻して、木曾まで前んだ。これまでは武藏國南多摩郡、相模との國境だからといつて、川一筋、山一塊はおろか、木の葉一枚落ちてゐなかつた。尤も棒杭は一本立つてゐるが、單た棒杭一本で、平原の平等無差別相が崩せるわけのものでない。

野模眼

およそ上川井から木曾まで、武藏野や相模野を眺めるよりも、秩火山脈殊には大山を目がけて、丁字形に路が幾筋も通じてゐるので、低山性の特色が分明に窺はれる。不二山は高いには違ひないが、あの白金を張つたやうに、肌理の細かく、辻ベツこいやうな、冷たいやうな山よりも、骨組の荒ッばい、坂東武者的な大山が、肩臂を突つ張つてゐるのが、こゝには似合はしい、鎌倉史を

野模相

平面に彫んだ大野原が、雨の鍍霜の槍に幾皮も剝がれて生體もなくなつてゐるのを、知らぬ顔に儼然俯瞰する立體は、これであるべき約束がある。秋になると、朽葉色になつて、皺くちやに揉まれた、襞の凹凸が、一つは夢の浮織で、遠くよりは晝も月夜のまぼろしの如く、一つは光の綾織で、近くは秩父の方へ尾を曳いて、まざくと走つてゐる大蜥蜴山から山へと無極に無極を繋

いだ一文字鎖の果てを手繰つて、自然の手すさ
 みを怪しむ旅客は、我である。このときには、高山
 もない、低山もない、全體人間一疋尺鱗に化けや
 あしまひし、地平を這ひ廻つて、一萬何千何百何
 十尺と、山の高さを測量してみたらとて、心懸
 の潮をはかるみをつぐいに、何等高低の痕跡を
 印するものぞ。四五年前の初夏、山崎紫紅子と東
 京の青山で雲の峰だか、山だか解らない紫の塊

を天外に仰いだとき、高いかな、あれは山だらう
 かと、首を傾けていふ、山ならおそろく、ヒマラヤ
 ぐらゐ高からう、日本にそんなのは無いと、二人
 で視力の鈍いのを笑つた、ところが熟く視ると、
 山である、しかも山の中でも、低い秩父の山であ
 つた、我々は一千米突とか、一萬尺とかいふ、疎末
 な統計で靈覺の慧を覆はうとしてゐたのだ、大
 氣の如き想像を、數字で編んだ網で押し伏せや

野模沼

うとしてゐたのだ、欺あざむかされるのは人だ。
併あし、かう面めんと向むかふと、大山おほやまの生地きぢはよく露あは
れる、山やまには松まつを植うゑる、谷たにには杉すぎを植うゑるとい
ふ諺ことわざがあるが、こゝでは正せい反はん對たいで、育そだちの悪わるい杉すぎ
が大山おほやまに多おほく、どこでも育そだつ松まつは、相模野さまみのの方ほうに
多おほい大山おほやまには杉すぎで紵ぬけられた黯あん緑りよくの隈くまが取とつ
てあるが、その間隙あひまには、畑はたけが拓ひらかれてある、春はるは
菜なの花はなが眞ま黄きであるから、短冊たんじやくを幾いく枚まいか貼はり交ま

野模相

せた屏風びやうぶのやうになつてゐるのも、この低山ていざんの
特色とくしよくだが、今いまはもう畑はたけも目立めだたない。しかも裾捌すそは
ききが緩ゆるやかで信飛地方しんぴちほうのアルプスのやうな、切き
つ截たつたやうなところがない、火山くわんざんの裾野すそには、
珍めづらしくはないが、これも古生層こせいそうの低山性ていざんせいの特とく
色しよくといつてよからう、しかも蜿蜓えんてんとしてゐるの
が不二ふじのやうに、整然せいぜんとして畏かしこまつてゐないだ
け大山おほやまを見みたときの感かんじが纏まとまつた例たとがない、

野模相

昨日見た大山は、けふ見たときの大山大山でない、大山を向ふに越えれば、甲州にも駿河にも行かれる、駿河には不二の裾野のやうな大野原もあり、甲州には赤石山脈のやうな、絶大の屏風がある、併しその間に大山といふ門が一本横はつてゐるために吾旋風の如き想像が、そこに突き當つて弾ねかへされる、低い高原(相模野)と、高い高原(不二裾野)の間の楔子になつてゐる大山を開き

得る咒語を唱へむとするものは、相模野に佇めよ。

野模相

冬になると透き通るばかりに銀色をした白雲が澎湃として大山を包み、鏝が白くて中央が空の色と同じに碧く光ることがある、それが冷めたくて燃えるやうだ、龍巻が一萬噸の船を捲き揚げるやうに、この雲に包まれると、虚空に幾座の大山が舞ひ上がつたかとおもふ、そのときは

野模相

相模野にも大きな志が一面に出来る、かゝると
き相模野の草は皆白く、楢は灰色になつて、見通
しに風吹き拂ふ黄道を、眩ゆげに白日爛々とし
て轉ずるのである、武藏野のやうに、立ばんだ榛
の樹も無い將基の駒を並べたやうな藁束もな
い水田もない川らしい川一筋もない、相模野は
刷り減らされた古鏡のやうに銹を帯び瘦せて
尖つた桑の樹と骨だらけの大山が、鮮やかに凸

野模相

面的に浮んで寫る、大山と相模野とは、雙方から
歩み寄つて、びつたり一つになる、野にある畫家
は、遠近法を縮めるであらう、大山といふ障壁が
あるため、茫たる相模野は制限せられて却つて
大を加へる有耶無耶の細い淡い山線を東京の
山の手武藏野から望むのとは違ふ。
それに相模野には、名の知れない芝塚(或は芒
塚)がある、信濃の桔梗ヶ原にあつた六十三の首

野模相

塚は、翻り返へされて、今影も止めないが殆んど
水平に近い或はゆつたりと頽れを打つて、小波
の立つやうな相模野に、瘡のやうな塚を見ると、
上つて四周を見廻はしたくなるものだ、こゝに
佇むと大山と不二が少しばかり根が上つて見
える、天文學者が屋根の上に立つのは、四尺でも
五尺でも天に近づかうとするためであらう、我
々が山を仰ぐのもさうである、塚の中でも武藏

野模相

野にない塚が一つある、何んな塚だといふと、
一體相模野の土は武藏野よりも那須野に近
いやうで武藏野には粘土が多いから赭つちや
けたり、黒光りがしたりする、相模野は凝灰質の
土が砂礫層の上に、薄皮を冠せてゐるのである
から武藏野に比べるといくらか不毛である、人
が近寄らないのも、その故であり、砂礫層だから、
水に乏しいから田が無い、藁束も無い武藏野の

野模相

畔の木を代表してゐる榛の木も少ない、その代り、莽蒼といつた氣が、大山の天邊から芒の穂末まで吐かれてゐる、それもその筈、相模野は日本本州の横つ腹に燃えてゐる大不平の焔で、洗禮を受けてゐるからだ、今から二百餘年も前不二山が大焼けに焼けて、寶永山を吐き出したころ、函根や大山を飛び越して、こゝらに落ちて來た灰や砂礫を、土人が掻きあつめて、焼石塚といふ

野模相

のを作つてゐるのがそれだ、一里塚、庚申塚、筆塚、戀塚、比翼塚、首塚、猫塚、貝塚、焼石塚、塚は紀念物である、塚好きの國民は、懐古の情の烈しい國民だ、この人為の紀念物の上に佇んで、近く仰がる、は天造の紀念塔なる不二や、大山である、多くの塚には猪の逆毛のやうな萱が生えて、鬼薊の花などが、この中から窮窟さうに首を出してゐる、人間を二つ重ねたより、高いのは無いが、路が

野模相

ついてゐないから、足が、りが困難だ。

(五)

木曾へ入ると、相模野とは、森の薄皮一つで、この皮を破ると直ぐ行かれるやうに思はれるが、武藏野と同じやうに、解り易いやうで解りにくい、路はそれこそ鼓の緒をしらべるやうに幾本も入り違つてゐるが、相模野と訊ねては、解りにくい、鶉の森(村名)とか、淵野邊(村名)とか聞いて見

野模相

るがよい、鶉の森へなら、原町田から入るのが順だが、木曾まで来たなら、淵野邊の方へ左に折れるがよい、淵野邊は、相模野の一角を占めてゐる村落であるが、純粹の相模野、それ自身といつた方がよい。

山もない、米も多く出ない、人家も稀な、淵野邊といふ村名をおそらく誰も知らなからう、さもあらばあれ、おもひぞ出づる、建武二年の七月、鎌

野模相

倉は薬師堂の谷で、護良親王を失ひ奉つた淵野邊伊賀守義博といふ名は日本人の頭腦に永世拭ふ可らざる烙印を押してゐる筈だ、吁、土窟怨！帝子吞冤、潜土窟、稜稜鶴骨、鬱鬱髮、幽燈影、青微吐、烟、天地長不見、日月………
 憤氣填胸、難自遣、嘆聲時與梵、嗚發、何物小臣、逞逆威、手抽白刃、從後突………
 慘は印度の黒穴、烈は英國の倫敦塔、それも比ひ

野模相

やうなき中世史の一齣に、軽い身分で重い役目を演じ、謹厚の人なほ獸の如く彼の名の上に牙を咬む、その淵野邊伊賀守は、こゝに住居してゐた、太平記その他には、淵邊に作つてあるが、西源院本太平記及び神明鏡には、淵野邊に作つてある、淵野邊の正しいことは、猶楠氏のまことは楠木氏を正しとすることくである、人間を白いの黒いのと、碁石並に扱かふのは、小兒の事である。

野模相

しかもかゝるとき暫く小兒の心になつて「土窟
怨今長不消紫苔如血地上滑」と謠つてみたい、か
う謠ふと氣が露々して、胸の痞が下つたやうだ、
しかも我をして、一切の悪を忘れしめよ、一朶の
雲翳もない天日の下、人間に涙一行の曇なから
しめよと考へ直してみる、かう考へ直すと、腹の
中が空虚になつて、おのづと足も軽くなるやう
だ、彼も板東武者の剛の者、華著なる荒原の中に

野模相

育つた赤裸々の自然兒彼や力の外何物も知ら
なんだ、力を崇めるのは高原人の通有性である
かつて江戸名所圖會を見と、澁谷金丸の産
湯を使つたといふ水に土人が七五三を張つて、
祀つてゐるといふのがあつた、英雄崇拜熱は武
藏野健兒の血管に、一道の黒潮を漲らして、親か
ら子、子から孫へと注いでゐる、相模風土記にも
左の記事がある。

淵野邊村、江戸より行程十二里、里老の傳に
足利將軍の時、淵邊伊賀守義博居住し、曆應中
に、大沼の蝥蛇を殺て、村民の害を除く、因て村
名となれりといふ。

大沼村 南にあり、潤五町許、曆應の頃、大蛇
斯に蝥し、土民を惱せし時、淵邊伊賀守これを
殺せりと云傳ふ。

龍像寺 淨源山と號す、曹洞宗、愛甲郡七澤

村廣澤寺末、本寺二世、巨海を開山とす、弘治三
年二月二十三日寂す、里老の傳には、淵邊伊賀
守毒蛇を殺せし後、蛇身を龍像權現と祀り、龍
像、龍頭、龍尾の三寺を建立す、當寺其一にして、
二寺は廢せりと云ふ、開山巨海の時世を以て
考ふれば、年代合せず、寺記總て其傳を失ふ、又
伊賀守の碑なりとて、古碑一板を本堂に置け
り、正和元年十一月 日淵邊伊賀守と鐫る、後

野模相

人の作爲せしものなり。

龍像權現社 淵邊伊賀守が、蛇身を祀りし社と云傳ふ。

淵邊伊賀守義博居蹟 村の北にあり、潤方

三町許馬場蹟、土居の蹟等、今なほ残れり、又第

六天の祠あり。

淵邊ばかりではない、相模野に生ひ立つた板東武者は、人間が粗悍で單純である、羨けられ

野模相

ると、鐵壁にも噛みつくが、人生感意氣時には涙を揮つて、生命も功名も、棒に振つて退けることがある、相模野を心核にしてゐる高座郡は、鎌倉時代前後には、大庭の庄、一之宮の庄、澁谷の庄などに分れてゐた、大庭の庄は、鎌倉權五郎景政の所領で、大庭平太景義、同三郎景親などが、この父祖相傳の土地から出た、頼朝の廻文や、院宣の御教書を得たとき、兄弟が相談づくで、景義は源氏

野模相

景親は平家に味方した、景親の言ふことには源氏は重代の主にて、御座は尤も参るべきなれど、一年囚になつて、既に斬らるべかりしを平家に擧げ宥めらる、その恩山の如し、又東國の御後見もし、妻子を養ふことも、いかでか忘れ奉つるべきなれば、平家へこそと、一方の言ふことには、和殿は誠に平家の恩にて世にある人、さもしたまへ、景義は源氏へ参らんと存す、源氏盛衰記かく

野模相

して、景親は石橋山で頼朝に痛棒を喫はした。一之宮の庄は、梶原平三景時の領分、景時は判官最負の世の中に、とかく評判のよくない男だが、一徹で、瘦我慢が強く、逆櫓の議論には、正しい筋道を述べながら、才子の辯口にゴマカサレて佛頂面をしたなどは、愛すべきところがある、末路の悲惨は更に憫れむべきところがある、澁谷の庄といふのは、相模野及び、その附近の六十何

野模相

か村を含んでゐる大庄で、領主は澁谷庄司重國
頼朝石橋山の旗擧げに、一番駈けに、味方をした
男だ、その次男澁谷次郎高重は、健保の亂に和田
義盛に味方して、煮ても焼いても喰へない、北條
の老骨を舐ふりそこね、同苗三郎五郎小次郎小
三郎一家一門の肝腦地に塗れ、所領を沒收せら
れて悔なかつた血性漢だ、それから曾我物語
で有名になつた剛力の俣野五郎景久も、この高

野模相

原の出生であるし、相模野の北邊當麻村からは、
範頼の家の子で、頼朝の寢所の床下に潜り込ん
だ、當麻太郎が出てゐる、梶原景季、結城朝光、宇佐
美祐茂などの宿直の殿原に取つて押へられ、責
むれども問へばとて、當麻の太郎は男でござる、
頑として口を守ること甕の如し、「吾妻鏡」に「當麻
者參州(範頼)殊被相憑之勇士、弓劍武藝、已得其名
之者也、……雖及數箇糺問、當麻屈氣、不發一言」

野模相

と感嘆されたのはこの男である。

相模野高原から出るものは、芒と荒男とである。高原に石はないが、高原の人間には骨がある。綱渡りを巧にしたり、土俵の廻りを廻つて歩いたりするやうな人物は一人も出ない、硬鐵の性、鍛へば火の如く赫となるべし、折るべくして、曲げられず、其終を令くせるもの、殆ど稀である。

「雉鳴くや草の武藏の八平氏」その武藏野から

野模相

も勇士が出たが、相模野に比べると、鎌倉といふ中央政府を離れてゐるだけ、それだけ、波及が微小である、相模野は最も鎌倉に近いだけ、波瀾の渦さかたが烈しい、たゞ中軸的、大人物を出さなかつたのは、この高原の土質は、氣運に吸ひつく、磁石性が弱かつたためであらう。

木曾から路を教はつて、左に折れた、左から榎林の間を往つたり、戻つたりして、一寸した潤い

野模相

路に出た、煩冠りの爺さんに淵野邊の路を尋ねると、お前さまは、先刻も聞かしたつけと、一本参られる、顔を見ると覺えのある爺さんだ、この人に路を聞いて、早足に追ひ越して来たはい、が、捷徑をしやうとおもつて、檜林へ折れこんだため、迷つて元の路へ出て、不仕合せに邂逅したのだ、今度も聞いて、又二三人に聞き直して、漸く境川へ出た。むら竹や小灌木の間を、鍵の手に屈

野模相

曲してゐる、橋は組板と紛ひさうに小さい、これが前にも言つた武州相州の境である、信濃や飛驒の境のやうに、一萬尺の氷岳が、宮女の襟のやうに、白く累なり合つてゐるのもあるし、このやうに、子供がいたづらに白墨で引いたやうな、ひよろく線もある。

橋を渡つて五六間も往つたかとおもふと、右に「不許葦酒入山門」が立つてゐる、石から龍像寺

野模相

まで一丁もあらう、寺の傍には六地藏が行儀をくづして寝轉んだり立つたりしてゐる、寺の見つきは剝げかかつた黒門で、門の屋根が亞鉛葺きだ、訪ねて来るやうな好奇人もゐないと見え、密閉されてゐる、敲いて見たが、人の氣はひ更に無しだ、そこら一面は草が茂つて、足を踏み入れると、長いものが、のたくり出はしないかと氣味が宜くない、生木の牆の間に、一二尺の隙間が

野模相

あつたから、掻き分けて庭内へと忍び込んだ本堂の前に芭蕉がある、野分が濟んだしるしに、葉は寸箋に裂かれてゐる、本堂を覗くと、古ぼけて陽の出た壘が敷かれて、寺小屋式の古机が二三脚置いてある、けふは日曜で休みと見える、承塵には淵野邊氏の定紋か何か知らぬが、紋を打つた幕を張つて、天椽から小さな乗籠が吊り下つてゐる、何の意味だか解らない、本尊の御釋迦さ

野模相

まは正面に安置されてゐる、太鼓もあるから、お務めをするときもあると見える。

本堂に向つて左に鐘樓があるが、蛇身を祀つたとかいふ龍像権現は、荒れたといふより、大破して芝居の辻堂めき、藁の納屋になつてしまつた、空を凌いで立つてゐる櫃の木に、蟬が啼いてゐたが、人が來たと知つて、キイツと納めて飛んで行つた、寺では百姓も、機織も兼帯と見えて、庫

野模相

裡の方で、杵の音が、不器用な柏子を取つてゐる、黙然と佇んでゐると、耳を掠めて羽蟲がブン、ブン唸つてゐる、水の如く澄み切つた秋の空に、棒を入れて掻き廻はすときに溢れる尖波が耳朶を拍つてゐるのだなとおもふ。

寺を出た第六天は、寺から北の方十町もあらう、村の人に聞くと、何でも淵邊判官といふ方がこゝで龍神を射つて取つたところだといふ御

野模相

十夜には、村のものが往くから、一寸賑やかだが、
今往つたつて、何も無いといふ、何も無いところ
へ往つて、何か見たいが、時間が無いので、止
めにした。蟄蛇を斫つたといふ池は、未だ残つて
ゐるだらうか、もしあれば、荒原の中に、老人の眼
のやうに落ち窪んで、冷たく、鈍く、光つてゐるで
あらう。

龍種を擁護し奉らず、蛇を斫つてかや、伊賀の

守、これで伊賀の守に別れる。
寺に沿つて、左の竹下道の阪を上る。上り切る
と、そこが相模野中での高原。

(六)

自分は、この相模野を淵野邊から、當麻へ横断
するつもりであつた。當麻といふのは、東海道平
塚から、八王子へ行く街道の間の宿ともいふべ
き、可なりの村で、古は當麻の宿と唱へ、旅亭櫛比

野模相

野模相

した繁富の地で、小田原北條氏時代には、月六次
の市を立でる、一六の日には、時用品の賣買が
盛んで、問屋や止宿旅人の監督として、奉行が出
張するといふほどであつたさうなが今は衰微
して火の消えたやうだ。當麻がいくら販やかで
も、背後に相模野高原といふ、冷库を控へてゐる
から、活氣も吸収され滅入つてしまふのであら
う昔も冷たく、今も冷たい高原のみ、ひとり不滅

野模相

の象がある。
併し當麻には、無量光寺といふ名跡がある。當
麻道場の稱あるこの御寺は、今でも緇素の信仰
があつて、界限では金光院無量光寺など嚴かめ
むい名を呼ぶより、一遍さまと尋ねる方が解り
が早い。——無量光寺の開山は一遍上人である。
その一遍さまを目懸けて、相模野を突き切
るのである。淵野邊よりこの間近い二里は高原

野模相

である、楢林があり、芋畑があり、坂があり、人家も、
と言ひ添へたいが、人家は淵野邊近くと、當麻近
くと、兩極に斑らにあるばかりで間の野原には、
無い、稀にあつても、晝間は人が作場に出てゐる
から、空虚が多い、作場とは高原を今開拓してゐ
るから、土地でさう言つてゐるのである、この邊
で路をさいても、茫々とした原で、方角を教へら
れたくらゐでは解りにくい、解りにくいから人

野模相

も教へてくれない、皆言ひ合したやうに、躊躇し
て、作場に人がゐるすうからお聞きやれとい
ふ、親切な農夫は二三丁も跟いて来て、噛んで哺
めるやうに教へてくれるが、その人に離れると、
ばてな、一寸立ち止まることになる。
自分は桑畑の間の路を行く、十字の路に出る、
左へ折れる、遊行道場一遍上人當麻山道の石標
がある、この石標に向つて右は津久井、左は鶴間

野模相

の追分になつてゐる左へ折れると一本松があつて右に溝と又石標が立つてゐるそこで今度は右へ折れる上溝は當麻の隣村である路を開くと左へ曲れ右へ折れる左を行けなどと教へられるので愚弄されるやうに危ふまれたが成るはと来て見ると路が凡べて角形に截り開かれてある人は言ふ武藏野の路は相逢はむとして往くとも逢ひそこね相避けむとして歩むも回

野模相

り角で突然遇ふことがあると武藏野は本街道や幹部線を除いての徑路が人の踏むまゝに線を引きいてゐる蹄鐵形の路が幾つも喰み合つてゐる殊にその角々や中央に林や人家や小流などが介まつてゐるから路がこんぐらかつて解らなくなるこがある相模野にもさういふところがある淵野邊や鶴の森でも村に近いところは人通りが多いから自然さうなる併し純

野模相

粹の相模野になると、もう人が通つたり荷車を
挽いたりしないから、反對に路が直線を引いて
ゐる直線を引いてゐるのは、土木課あたりの御
役人が、熨斗餅に庖丁を入れる氣で、幾何的に割
り拓いたまゝであるからだ、縦も横も直線だか
ら、碁盤の目のやうだ、故に逢はうと思つて行け
ば、必ず逢はれる、避けるのも同じだ、人が稀だか
ら、傍道へ踏み入られない、枝も無い幹が、畫かれ

野模相

たまゝ保存されてある、もしこの保存に多少の
變形ありとすれば、それは件の道の中央から女
郎花や、桔梗などが咲いてゐることだけだ、樺林
は大山の方に偏つて塊つてゐるから、原の中央
に眼を遮るものとしては無い、あるといへば、至つ
て稀な耕作小屋だ、それも畑の中から、屋根だけ
浮いて見える、北海道邊の殖民地へ行つたら、こ
んなだらうと思はれる。

野模相

自分はこの長方形の田楽型とも言ひさうな
道を兀然と一人で歩いた、一人で歩いたとは正
面の大山を除いて、談相手が前後左右に何も無
いからだ、かうなると、何でもいゝから動くもの
に遇ひたいとおもふ、畑は刈り取られて、風に動
くものはない、空には雲が無いから、飛ぶものも
見えない、只だ動くものは、煤の塊のやうになつ
て飛ぶ鳥が幾羽かゝた、鳥の動くのは、寂寞に魂

野模相

を入れるばかりだ、公磨の寂寞を加へる。
さうおもふところへ、商人風の尻、端折の若
い男が、一人来た、手にば、二莖の女郎花を持
てゐる、無下に卑しい面構へで、女郎花は自分
相應な持ち物だと、不平を起しながらも、路を開
いた、お話ししても解りにくい路です、からな、と氣
の毒さうに分疏して、それでも、町噂に教へてく
れた別れて、あの男が、何で女郎花を持つてゐる

野模相

のだらうと考へた花を愛づるといふやうな、生
温い考ではなからう、あまり寂びしいから、無意
識に女郎花を手折つて見たが、捨てるとなると、
話相手に別れるやうな氣がして、捨てにくくな
つて、それで持つてゐるのであらう、寂寥か持た
せてくれた友は、植物では無い、その女郎花なり、
桔梗なりの孰れは、友たる資格に缺てゐない限
り、彼の問ふところではなからう、一旦巻へ出れ

野模相

ば、寂寥の友は捨てられて、馬蹄の塵となるに決
まつてゐる。
こんなことを思ひながら、長方形の路が盡き
ると丁字に遮つた路がある、もう解らない、真直
な路を真直に驅けて、耕作小舎へ躍り込む、幸ひ
に人がゐた、單衣一枚の破れから、赤銅作りの肩
の肉が喰み出てゐる、強ひて頼んで、迷路の無い
といふところまで、道案内をしてもらふ。

野模相

この原で路を迷ふ人が、幾人あるか知れない、一度迷ふと山路(櫛林)ついでをいふへ行くのもある、夕方になつて、一ツ家へ頼みこんで、夜露だけをしなのぐのもある、あの櫛林の頭が、兩方から低くなつて切れ目になつたところがあつたせう、あすこへ行くと當麻さまへ出るのだが、こんな晴れた日は、雨(あめ)が降つたり、霧(きり)が下りて御覽(ごらん)じろ、土地(とち)の人(ひと)でも、方角(ほうかく)が知れなくなり、ます、

大山(おほやま)の皺(しわ)の出方(でかた)と、櫛林(しほやし)の切れ目(め)とが、當麻(たへま)さまへ行く順禮(じゆんらい)方(かた)への路(みち)しるべだといふ、山(やま)を目標(めくせう)にして、方角(ほうかく)を決(き)めるとは、高原(こうげん)的(てき)でおもしろいとおもつた。

野模相

直線(ちよくせん)な、方形(ほうけい)な路(みち)は、作場(さくば)が盡(つ)きると、共に盡(つ)きて、櫛林(しほやし)に入(はい)つた、櫛林(しほやし)はもう落葉(おちば)が多(おほ)くなつてゐる、林(はやし)の無いところ(ところ)は、芝原(しばはら)道(みち)で、濶(ひろ)い路(みち)や小(こ)さい路(みち)がある、山稼(やまかせ)ぎの人(ひと)が入(はい)るのだから、濶(ひろ)い路(みち)

野模相

も先へ行くと尖つてしまひ、小さい路が亦幾筋にも分れたりして、人の迷ふのも、この林の中が多いいといふ、畑があつた、畝道らしいところへ出ると、不意にゴツと音がして風が起つた、柿の落葉は、絲目をつけたやうに、ずいと空へ颯る、足許の蟪蛄の屍骸が、けろりと起ち上つて、居住るを直す、物皆は、行くところへ行けや行け、止まらんとするところに止まれかし。

野模相

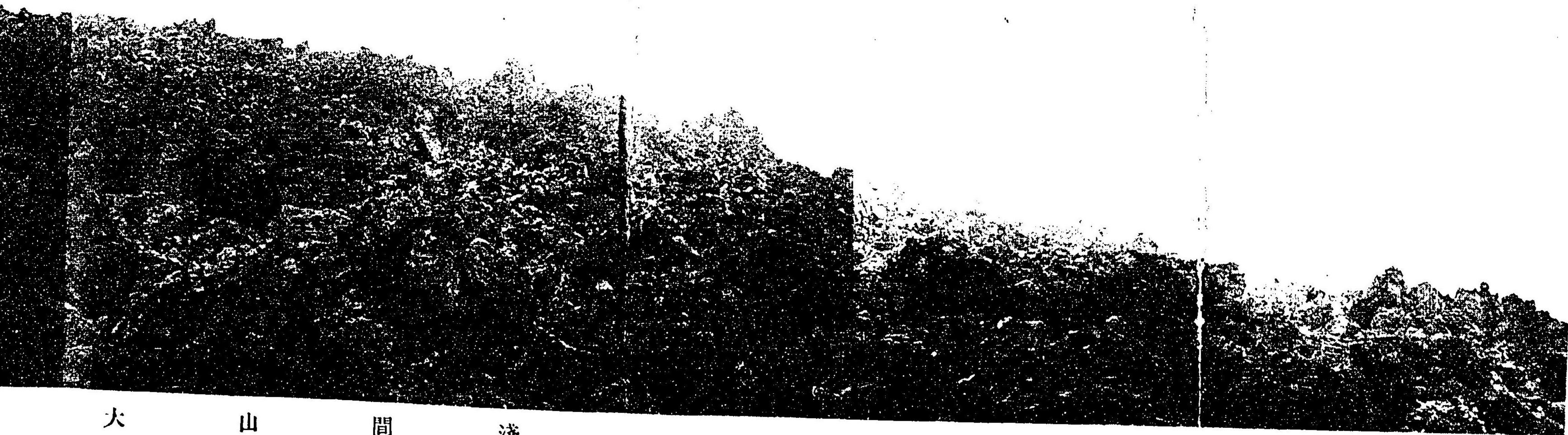
道を傳ふる婆羅門の西に東に散ることく
吹き漂はす秋風に
飄へり行く木の葉かな
秋風に向つて悠揚と、この詩を謠ひ得る自分は、生涯の中、最も幸福なる自分であると思ふ。
小山坂といふのを下ると、水車があり、小舎があり、始めて村落らしくおもはれた、小舎があつ

野模相

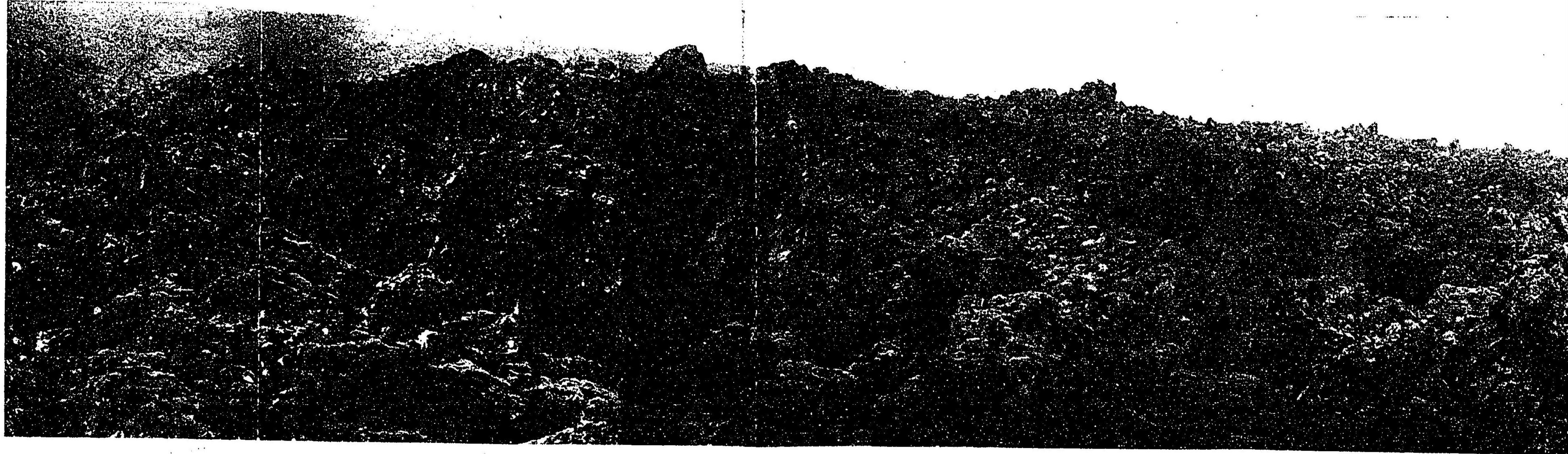
たからでは無い、水音がしたからである、相模野は水に渴してゐる。

桑畑の間を辿つて、大山の前に蜿蜒つてゐる道志山脈を見た、その眼を下へ移すと、黒くこもりとした杉の森が見える、金光院無量光寺の六百年は、この黒い輪の中に包まれてゐる。

文中に引きたる史的事實は、所謂「正史」に據らず、盛衰記、太平記、風土記等を採りたり、旨とするところ趣味にあればなり



大 山 間 淺



間 山 大 熔 岩 流

冬の浅間山

我が浅間に登りたるは、今より十年前の晩秋
にして、是れ實に我が山らしき山に登りたる、最
初の山なりき。當時夜闇けて御代田にて、汽車を
下り、同車の人に教へられて、鐵道線路の踏切に
近き狭苦しき旅籠屋に投じ、翌朝宿の隠居と、そ
の孫なる壯人を雇ひて、登山を果しぬ。山は霧深
うして、人は糶糊の底を泳ぎ、我浅間に登りて、實

冬の浅間山

山間淺の冬

に淺間を見ずして下りたるなりき。
その後、毎歳の夏、殆んど淺間の麓を過ぎらざ
るはなく、過ぎりて淺間を見ざるはなかりしか
ど、上りたることは無かりき、しかもいつも、かの
いぶせき旅籠屋と、その夜徳利をぶら下げなが
ら、我が枕邊をよるめきく怒鳴り歩ける隠居
をおもふ、今はこの土地も開けたるやうなれば、
かの古風なる旅籠屋は失せたるならむ、老隠居

もこの世にはあらぬなるべし、おもひ出多きは
旅なる哉。

山間淺の冬

ことし(三十九年)の晩秋、碓氷を踰え、輕井澤に
宿り、追分ヶ原の高原を過ぎて、行々淺間を仰ぐ、
褐色の天鵝絨に、黒松の針を刺し透し、半肩の毛
は剥げて、鼠地に玄く光れるが、無縫の青氈なる
空に包まり、暖氣に圓くなりて伏せるを見て、我
いくたびか胸を拊ちぬ、淺間を圍める空氣に、こ

山間淺の冬

の巨人の呼吸交はらぬはなく、尖痛の氣あたり
に充ち満ちて、仰ぎ見るもの、涙腺おのづと涙を
催さゝるはなし、山下秋行いて、草黄に、木の葉赭
らみ縮れたれど、淺間のみは、躍如として若やぎ、
氣を吐くこと盛に、時には聲を擧ぐること大なり。

十一月(三十九年)十日の夜、我と友と、知らぬ旅
客と三人のみを、輕井澤に吐き出して、懶げに喘

山間淺の冬

げる汽車の外に、活動なき大野原の上に、そゝり
立ついつもの巨人は、沈黙して焰も赤からず、停
車場の前には、宿屋の名をしるせる七八個の提
灯、おもひ／＼に揺らぎて、その中の一つに、かの
旅客は誘はれて行きぬ、残れるは我等二人、新輕
井澤を足早に過ぎて、霜白く乾からびたるやう
なる大野原を、金剛杖、からむ、からむ、とうち鳴ら
して行く、冷たきこと、齧すやうなる空氣は、淺間

山間淺の冬

嵐に壓搾せられて、一段の重厚を加へ、簾の如く
強く引き締まりて、こゝなる二個の動體はさな
がら搾木に架けられたる胸苦しさに、ひた走り
に走りて、舊輕井澤驛に到れば、宿屋にさす燈火
もなく、静まりかへりぬ、たゞ霜のおく水平の
脈、闇より出で、闇に白し。

つるやを敲き起して、宿る、請せられたる二階
の一室の壘は、冷えかへりて冷鐵の如く足袋脱

山間淺の冬

きたる素足を爪立たしむ、翌日登山の導者と準
備とを依頼して眠る、深夜般々として、遠さが如
く、近さが如く、吼ける音を聴く、驛の中央を流る
る雲合川の水音にては、よもあらじとまどふ、知
んぬ、是れ夢の十里の枯野を駆けめぐりて、荒ら
かに天警を宣る淺間が叫喚の聲なるを。

翌くる朝起き出て、先づ氣がかりなれば窓を
啓く、昨夜星爛々たる高原に、けさは雲低く垂れ

山間淺の冬

て、油煙を潑したる如く、その尖端は、汀線の如く
一文字、編笠の諸山を洗ふ色の白く黄ろくもあ
らぬは、いかに日に遠きかをおもひやらる、宿の
主人は心利きたる男なり、雉子の肉と大根と煮
交せて熱きこと舌焦がすばかりなるを、早立ち
の朝餉にと、鍋のまゝ、火鉢の上に齎らし來る。喫
し了りて、はやくより來り待てる導者を麾いて、
共に發す。

山間淺の冬

輕井澤高原は一望皆霜白、鵝茶白の西洋人の
別墅のみ、枯芒の中に、赤味を含みて、何となく一
味の暖氣を漲らす中に、瘦せて小さき唐松の林
は、黎檬黄に光り、高原の風に毛を擦り切らした
る萱の元山に渦まく雲は、氷の如く固まり、雲と
雲と相合ふや、氷と氷と相觸るる如く鏗々然と
して鳴らむとすれど、さすがに昇る旭を包む能
はず、離山の頂先づ鯖色に青く光りぬ、木立がく

山間淺の冬

れの古沼の銹にして見まほしの祕色や霧の淺
間雲の淺間雨の淺間を再びすることを恐れた
る我は、かくても猶淺間の見えぬを、いかにもど
かしくおもひ、いかに燥り立ちたるぞ、しかも雲
の流るゝこと早く、碧水の底を見せたる空に泡
沫の如く淡々しく漂ふに至りしが、さすがに淺
間は高かり、雲綿々として山の厚きこと、平生の
二倍にも達しぬ、我は鈍を揮ひて、かの厚きもの

山間淺の冬

を削り落したくおもひぬ。
離山の宿より、雲場原を過ぎて、沓掛へとかゝ
り、街道の半より北折して、淺間に向ふ、金色に枯
れたる唐松の間より、近く小淺間と大淺間と、我
頭を壓するばかりに露れたるあり、今にして、お
もふ、先の雲の波は、淺間を十二分に洗滌して、こ
の凜然たる生色を瑩き出だすためなりしを見
よ、唐銅を鍛へ成したる如き頑強の膚をくつろ

山間淺の冬

げて、悠々天に向へる我が峻嚴藉さゝるの山を。
路幅ひろきは三間狭きもその半はあはるべく、
路の右には寒玉を束ねて駛る暗紫の小流あり、
湯川といふ、水煙蒸々として立ち登るところ、岸
なる松の木かげに、水神石廟しよんぼりと立つ。
路は爪先上りとなりて、裾野の大野原開けぬ、
唐松の梢頭霜の刃を翳して尖更に一尖玄黒漆
の如き土を擡げて高き霜柱を踏み碎き、山稼ぎ

山間淺の冬

の燃木取り、二三人我一行を追ひ來る、淺間へで
すかと馴れくしげにいふ、冬霽の日天は深淵
の如く濃く、雲は掻き廻はされたる揚句、東の方
へと團められ、片寄せられ、我が影地に落ちて、長
さを淺間の噴煙と争はん、とす、原には馬を牧す
ればにや、馬頭觀音の石塔多く立つ、愈よ上りと
なりて、唐松は稀少になり、芒原となり、灰黄一色
に塗り潰されたる上を、ほうけたる尾花の眞白

山間淺の冬

に湯氣の立つ如く流るゝあり。
日出てたれど、冷骨を刺し、手は飾海老の如く
赤く、吐息は白氣となる、草津へと拓きたる新坂
を谷に沿うて屈折す、櫓や栗の枯木多く、虎杖も
しなびて麻殻より細うなりぬ、行々追分より草
津への路と相對して、高低を争ふ、かへりみれば
原潤うしてその盡くるところ、八ヶ岳は肌まで
透き徹らむとする藍あまりに濃くて鐵鏽を刷

山間淺の冬

き、空色と同じ色を重潤して水底に緒一つ動か
ざる長鯨の如し、原のおもてには秋葉の暗紅色
斷崖の如く黒松の木陰に燃え、千切れたるはこ
ゝかしこに轉がる、殊に唐松の林の、豆腐の如く
四角に截り離されて、梢頭均らされたるやうに
平準相をなせるは、不二の裾野などに見ざると
ころなり、路も皆灰白の火山灰、不二の裾野に見
たる如き、赭褐のものは之を知らず。

山間淺の冬

上州信州國境の平に到る輕井澤へ三里半草津へ七里といふ、ふり仰けば三國峠一帶の山氷條走りて藍朶にかゝり白き限界の波動を以て、空際を斷ず、印象きはめて嚴格。

小淺間の南より東へと、空林の間を行く、馬返しといへるは、木の切株などありて、林間僅に均らされたる明地なり、なまじひ焚火のあとの焼木抗などを存せるだけ、寒さをおぼゆ、こゝより

山間淺の冬

淺間の煙は眞白になりて直立するを見る、空林も四五丁にして盡き、傾斜や、急になりて、淺間の西麓に出づるや、蒲色の熔岩老松の皮の如く、小豆を煮固めたる如く、小淺間の頂にこびり粘けり、仰けば大淺間の釜(噴火孔)は殆ど水平状をなして、上毛の平野より見たる荒船山の頂の坦平なるにも似たり。

次第に上るに隨ひて、小淺間の西瘡は三角塔

山間淺の冬

形をなし、裾に緩斜の一線を引いて大凹みに大
淺間の基點をなすところに達するや、道は火山
彈のみなれど、この方面よりは、多くの人登るた
めにや、明らかに踏み慣らされあや、傾斜は不二
などに比して、さまでに急ならず、白光爛として
肩を聳やかす雪の白根山は北に鼻曲り山の三
角測量標は東に、鮮やかに人立して我を喚ぶ脚
下に延展せる茫々六里ヶ原の中央を、電光形に

山間淺の冬

通ずる路あり、方言野火除けといふ、燎原の火を
留むるの謂ならむか、上れば、妙義荒船御荷鉾、八
ヶ岳等の列岳あまりに明らかに見え透きて、切
截したる模型圖を見る如くなるが中にさすが
に、六里ヶ原は、四周に赭土を捏して、つまみ上げ
たる如き小丘を圍ませ、その間に乾固まりたる
押し出しの熔岩は、飴の如く延び、赤褐色を一面
に掻き廻はし、明るさが如く暗さが如く、見詰

山間淺の冬

たる眼は恍惚として物忘れせらるゝかたちなり。

猶上るに隨ひて、雪あり、昨夜降りたるものならむと導者はいふ、唐松は焼土の中に疎々に立てども、丈短かくなりぬ、この木も失せて全くの焼山となるころ、不二蒼く見えたり、絶頂は東風甚だ稀に、西風いつも強く、硫黄臭烈しく、飯食ふに宜しからずと聞て、中腹にて飯をしたゝむ、孔

山間淺の冬

音はや雷の如く、頭上に落ちかゝる。

又上る、下より水平状の釜とおもひしは、外輪の足場ともいふべき路にて噴火坑はなほその上に在り、孔の外壁とこの外山との間には、池状をなせる窪地あり、賽の河原なりと導者はいふ、或は舊噴火坑の跡ならむか、之を左に見て上るころ、信飛境上日本アルプスの雪線、一閃して眸に陽炎の如く、迂りこみぬ。

山間淺の冬

火口壁はや一二丈の頭上に在り、煙は圓柱となりて、天を衝く、風吹かざりしため、直上して上に扇の如くひろがり、黒沙に白流を漲らし、日光を受けては表を見せ裏をかへし、人を呑みては人を吐く、直徑六百六十尺と稱せらるゝ噴火孔の外壁は東と北に低く南と西に高く、「小諸出て見よ淺間の山にけさも煙が三筋立つの俗語にて想像したる二三旒の煙にあらで幾十筋と

山間淺の冬

いふを知らぬが中にも東と西に離れて、大炷煙あり、鑿々として鳴りはためき、空氣の流動迅速になりて、瀑を逆上らす猛勢に、抵抗の崖もなければ、斷崖垂直無限を出で、無限に引く、およそ自然界に於て、噴火孔の垂直線ほど、我が圓錐形なる視角に反抗して沈痛なる鐵錘を投ずるものなかるべし、この直壁の南東には、七八條の裂罅を生じ、煙は絲の如く、噴水の如く、その絶え間

山間溪の冬

に覗へる孔底に白蛇ののたぐる如きもの、ちよ
ろちよろと走れるは石をも爛らす熱湯にや、孔
の周邊には、徑二三尺に達する焚石舖の切味の
如く轉がり、石と石との間に介まれたる雪塊は、
大根の截片の如く、平たく蠟白になりて、氷れり、
孔と相距ること七八町、前掛山の西嶺獅子岩は
太古噴火孔の外壁を、残して、屏立せり。

この強烈なる噴煙に背を威嚇せられながら

山間溪の冬

正面に眺めたる日本アルプスは、光線を分折す
る凸鏡の如く、雪の角氷の牙、褶曲して天外に列
なり、殊に誰の目にもそれと知らるゝ槍ヶ岳は、
この褶波の奔放せる中を、三稜玻璃となりて鮮
やかに凸出す、南は常念ヶ岳穂高岳、北は白馬、鎧
ヶ岳に至るまで、この錯亂、雜排せられたる大岳
は、寒剣より鋭く磨かれて虚空の如き水と大羸
の如き空を一文、字断せるさへあるに、やゝ離れ

山間淺の冬

て、御岳乗鞍は、火山性だけに、孤立して、いやが上に高き凸棟を屹立したり。

我等は追分驛に下らむとして、無間澤の頂より直下す、岩石の間稀にコメス、キのうら枯れたるが二毛を顛はすもあれど、路は磊々たる岩片それも圓楕なるはなく皆尖角切錐、しかも山巔より更に中腹に多きは上のももの皆轉輾して、來れるなり、中に硫黄と灰と混同して、固まりた

山間淺の冬

るらしき帶黄白色の礫塊を挟む、沓掛方面には、栗子大小豆大のもの多く、上州方面には熔岩の床を敷けども、この方面(追分)には熔岩を見ることなく、只山巔より南方無限澤に押し流し來れる斷石、屑石、八九十間の幅を以て、裾野に下ると二里に及ぶ、中途第一外輪山、牙山と、前掛山の間の新月形をなせる湯の平を望むところより、導者の不案内にて路をあやまり、林に入る、岩高

山間淺の冬

園(とち)土地(ち)の人(ひと)芝(しば)杉(すぎ)と言(い)へりコケモ、クロマメノ
木(き)等(とう)石(せき)南(なん)科(か)の植(しょく)物(ぶつ)赤(あか)松(まつ)の間(ま)に折(せつ)載(ざい)の如(ごと)く伏(ふ)せ
る外(ほか)には鈴(すず)蘭(らん)所(じょ)謂(ゐ)谷(や)間(ま)の姫(ひめ)百(ひゃく)合(ごう)の白(はく)銀(ぎん)の小(こ)鈴(すず)
影(かげ)失(う)せて珊(さん)瑚(こ)の赤(あか)實(み)を結(むす)べるを(を)見(み)るの(のみ)み、い
た(た)びか谷(たに)に下(お)り林(はやし)を潜(くぐ)り萱(かや)の中(なか)に身(み)を没(ぼつ)しな
どして辛(から)うじて御(み)代(よ)田(た)上(の)り(の)道(みち)に出(い)づ。
裾(すそ)野(の)に規(き)則(そく)正(た)しく植(う)ゑられたる唐(から)松(まつ)は金(きん)粉(ふん)
を吹(ふ)きたる如(ごと)く、ひ(ひ)と(と)きは日(ひ)に輝(かが)き、そ(その)か(か)た(た)ち

山間淺の冬

四(よ)角(かく)々(々)の(の)色(しき)紙(し)を高(かう)原(げん)の臺(たい)地(ち)に貼(は)りつ(つ)けたる
如(ごと)く山(さん)趾(し)は針(しん)葉(え)樹(じゆ)林(りん)次(じ)第(だい)に多(おほ)くして金(きん)絨(じゆ)滑(なめ)ら
か(か)に裾(すそ)を引(ひ)く、そ(その)沓(く)々(々)の(の)間(ま)を千(ち)曲(ま)川(が)が例(れい)
の蛇(チツクヌボウ、カアツ)行(ぎやう)曲(ま)線(せん)を引(ひ)いて、のた(のた)くりゆ(ゆ)くを、や(や)ら(ら)じと
や(や)らに八(やっ)ヶ(ヶ)岳(たけ)は毛(け)脛(すね)を空(くう)間(ま)に跨(また)がして足(あし)の甲(か)
を洗(あら)は(は)すが如(ごと)く見(み)ゆ。
漸(やう)く御(み)代(よ)田(た)に出(い)でたり、腹(はら)空(す)きたれば、信(しん)州(しゅう)名(め)
物(ぶつ)の蕎(そば)麥(ばく)食(く)はん(はん)やと、鐵(てつ)道(どう)線(せん)路(ろ)を踏(ふ)みこ(こ)えて、停(てい)

山間淺の冬

車場の裏手へ出で、今鬼龍山春日山の一行相撲
興行を終へたるところとして、村人のさむ氣に肩
を蹙めながら、急ぎ足に、狭き畝道を右往左往す
る間を通りぬけ、線路の傍の安泊りに、紙を細か
く切りて楡形の看版に貼りつけたるにて、それ
と知られたるところへ、金剛杖をひきずり込み、
蕎麥を注文せむとして、爐邊を見れば、炬燵にぬく
もりながら、二三人の小角力と世間話に興し顔

山間淺の冬

なる老人あり、爐邊にのみ團欒して、戸をしめ切
り煙の中に燻ぶりて、酒をのみ仰ぐを唯一の樂
しみとする山中人士の常として、眼は爛れたるや
うに紅を潮し、鼻尖も擦りたるやうに赤くなり
たり、寒れたる翁かな、されど確に見たやうな顔
とおもひぬ、傍に爛徳利の一本まで添へられて。

参照部著『山水無盡藏』 淺間山の煙

日本アルプスの南半

一 信州に入る記

甲府から龍王の間、汽車の窓から茅ヶ岳と金ヶ岳を見る、丸い雲が毬の様に二山の間を呑氣らしく轉つてゐる、空は曇つてゐる方ではないが、輪廓の劃然した重量のいかにも重さうな雲が、山の屋棟に蝙蝠の羽をひろげて、びつたりと冠さつてゐるのは、夏の山國によく見る所であ

るこの日はおそろく甲州で雲の帽を脱いだ山もあるまいから、天の一方は、多島海を現したわけだ、空と地の間の雲は鏡に紙を貼つたやうだ、何枚剥いても破れても、奥がふかい雲の戸帳が開いたり、閉ぢたりするたびに、烈しい光線が吸ひこまれる、吐き出される、前山の緑が潮のさし引きするやうに、明るくなつたり、闇くなつたりする、地藏、鳳凰、駒ヶ岳は、海底のバルナック艦隊

記る入に州信

のやうに沈んでしまつて、何千年経つても出て
来られさうにもない。

當面に八ヶ岳を見る、雲の砲丸がつるべうち
にされて、山を駆け上つて行く、はては印度人の
頭の布巻のやうに、厚くなつて、結びつ放しの端
が、いつ解けるやら、裾野へと緩く引く八字形の
線が端然、整然、一つは夢の郷から引いて来て、一
つは幻の國へと返へしてゐる。頭も胸もかくれ

記る入に州信

て、悠然とした裾捌きばかり見てゐると、不二も
八ヶ岳も、同じやうだ。東の聖と、西の哲人とが、雲
の表で默契してゐるのを、跪づいて金峰山ついで
さの山々が、覗つてゐる、併し甲州方面から見
た八ヶ岳は、どうも小さい。茅ヶ岳の小さいのに比
べてさのみ著るしく頭抜けても見えない。韭崎
から、日野春に向ふころから三蓋笠の編笠岳が
雲のしぶさを切つて濡れ色に光つてゐる。権現

信州に入ると

岳は動く波の下に動かぬ波の峰々を蜿ねらし
て向ふが横に走るなら、こつちは直ぐに立つて
走るといふいきほひを示してゐる、釜無川に沿
いた七里巖の熔岩を見ながら、汽車は次第に上
つて行く。

自分は河田黙君と、同車室に對座して、窓外を
熟と眺めてゐる、二人の視線がちよいと合ふ又
外を見る、又内で合ふ、二人の鼻と鼻との一尺は

信州に入ると

かりの間隔を、高山の吐息が通りぬけてゐる、そ
の傳波を車中で二人の外に、受けてゐるものが、
幾人あらうともおもはれない。或停車場で、自分
は用があつて下りた、不意に自分を呼ぶものが
ある、見ると河田君だ、君の涼しい眼を見たとき
は、嬉しかつた、君は植物研究のため、木曾駒へ上
り、御嶽へ登るのだといふ、何處へと聞かれたか
ら、自分は常念岳へ登るつもりだと答へる、つも

信州に入るに記

りといふのは常念岳へは、どこから上るのか、登れるのか、どうか、それも解らぬからだ、一つ室になつて話が興じて来た、富士見に向ふころ、落葉松が見えると河田君は指さす、黄朱の花が八ヶ岳の麓の野に、咲き亂れたところは、金泥の裾模様さながらなるを、蹴立て、波を起すばかり、一群汽車に向つて走つて来るのは落葉松だ、あま、り大きいのは見えなかつたが、信州で落葉松を

信州に入るに記

見ないと、信州らしい気がしない、信州らしい気がしないといふのは、山國らしい感じが起らないといふことだ、自分は浅間山へ登つて、北佐久の鹽野や、芝生田の官林におどろいたが、今は秣場にしかなつて居ない、八ヶ岳東麓の裾野、千曲河以西の地、延山が原から、流鏑ヶ原地方ついでには立科火山の北麓地方など、落葉松を植ゑたら、嘸ぞよからう、南安曇も大野川から、奥の乗鞍

信州に入るに記

大火山の東麓の裾野などは、幾千阿歩あるか知れないが、こゝにも苗を植ゑて欲しい、さうすれば今に落葉松が、簇々幾千萬本、夏は緑の殿堂が、奥ふかくなり、冬は黄金の雲が高原に屯るして、眩く燃えるやうになるだらう、そのときは信州は山國で、落葉松國で、嘸ぞ尖つた國になるだらう。

こんなことを考へてゐるうち、八ヶ岳の小屏

信州に入るに記

風は、一折して権現が尖つて来た、赤岳の頭は、緒らんで膨れてゐる、雲の中から五百羅漢の百分の一ぐらゐの顔が見える、道に茅ヶ岳などと、違つて、毛氈の浮織のやうな柔和な相がない、高い空氣の膜に隔てられてゐるからでもあらうが、禿げて裸になつて、澁を塗つたのか、夢を塗つたのか、時代を塗つたのか、解らない色をしてゐる。

富士見に汽車が停まると、西岳は近く、阿彌陀

岳も出て来る、御柱山かとおもはれるのもある、
八ヶ岳の肩幅は、側面で見ただ方が肩瘤兀々隆起
した、逞しさが解る、おしなべて山は、側面か裏山
から仰ぐものだとおもふ、富士見までは汽車が
上り一方だが、駒ヶ岳八ヶ岳兩大山の仄する間
を、のろく行くので、このくらゐ大山岳の多く見
える、汽車は、日本中でも少からう、晴れたときに
は不二も見える、松本平に面する信飛山脈も見

えるさうだ、けふは生憎雲で駒ヶ岳一帯はやつ
ぱり何も見えなかつた、寧ろ何も無つた。
先刻から頻に、産業の話などに、夢中になつて
る土地の人らしいのが、あの人も大分賣り出し
ましたねと、相手の同意を求めてゐる、何を賣り
出したのかとおもつて、その男の視線を辿つて、
窓外を見ると大の髯男が真ッ黒になつて十五
六人も塊まつてキヨロ／＼してゐる中には草

鞋穿きで、大刀を佩かないばかり、西南戦争にでも出かけさうなものもある、あとで聞くと、この日は小川射山といふ信州人の發起で南信探勝隊とかいふ名の下に、東京の新聞雑誌記者が同列車にゐたのが、こゝで一同下車したので、この中には東道の主人をはじめ、紀行文家遅塚麗水、文藝批評家長谷川天溪、畫家中村不折、俳人藤波樂齋等の諸豪が居られたのださうだ、併しそれが

解つたにしても、誰が何を賣りだしたのかは、解らずじまひである。

上諏訪で自分は汽車を下りた、河田君等は、鹽尻の方へ。

上諏訪の宿屋で、牡丹屋はじめ、目ぼしいところは、皆南信探勝隊員の御本陣で、來客悉く謝絶だ、とは知らずに、自分は牡丹屋に草鞋を解かうとしたら女房らしい人が、奥から草履ハダ、

信州に入る記

で飛んで来て、出迎へるのかと思つたら、揉手で
ことはつて、隣家の中岐阜屋とかいふ下等な旅
宿を宛てがつてくれた、自分と同一な運命に遭
つた旅客が、皆こゝへ落ちこんで来る、汽車の中
で自分の草鞋が座席に觸れたとかで、眼を不等
邊三角形にして怒つた、某女學校の訓導、何の太
郎兵衛君が、女學生二人を同伴して、植物採集鑑
を重さうにブラ垂げて、自分の室の前をズツと

信州に入る記

通行した、吳越同舟、恩讎一如たりぢやと、一閑張
の机に肘を突いて、地圖をひろげたまゝ、悟つた
つもりである、こゝもやがて満員となつたと見
えて、神さんが表で客を断つてゐる。明日は一萬
尺の天外に岩を枕に、偃松を衾にして、寝やうと
いふ自分だから、中岐阜屋の入口の室をあてが
はれて、蜆の味噌汁と、鰻のブツブツ切りの煮つ
けを三度喰はされても別に不平も言はないが、

信州に入ると

全體自分には諏訪がきらひだ、湖水も好かない、温泉も好かない、宿屋も氣に入らぬ、諏訪で好きなのは、八ヶ岳ばかりだ。その夜は、市中をうるついで、地圖二枚を買つた、早速常念岳を見ると、ある、三千百二十四米突とある、參謀本部二十萬分一圖に無かつた山が、こゝに載つてゐるのは嬉しい、蝶ヶ岳が二千四百六十七米突、鍋冠が二千四百四十米突、あるぞ、あるぞ、明日が待たれる。

二 日本アルプス連嶺を觀する記

日本アルプス連嶺を觀する記

上諏訪から下諏訪まで、八ヶ岳以下、皆雲で見えない、小田と鹽尻の間、霞がひどく下りて、しづきが顔にかゝる、落葉松の梢は、露の玉を貫ぬいてゐる、鹽尻、村井、大方は、豆畑、松本に到るまで遠山は見えない、桔梗ヶ原でこの前見えなかつた落葉松の、稚い林があつた、雨や風は落葉松宗の

本日アプルス嶺を觀す記

ために巡錫の使徒となつて信州中をひるめて
ゐると見える。松本を出て、汽車から犀川を望む、
こゝからは信飛山脈の前山のみ見えて、一萬尺
の高山らしいのが、前山の肩に腮を載つけてゐ
るのが、ちよいと一つ見える、何といふ山だか、同
車の人に聞くと、聞いた通りの質問を、隣りから
隣りへと移してくれた、しかして西の窓側に座
を有してゐた自分の質問は東の窓から風と共に

本日アプルス嶺を觀す記

に通り返してしまつた。
明科で汽車を下りて、左へ折れ、犀川に沿いて、
犀川の長橋を渡る、有明山は不二形に立つ立つ
て、左の低い山の間から、蝶ヶ岳が翅を延してゐ
るが、目ざす常念の大岳は見えない。
一萬尺の雲表を横絶する信飛國境の大アル
プスは、殊に冬日この橋から、鮮やかに見える、そ
のときには、有明山と蝶ヶ岳が前立ちになつて、

本日アプルス嶺を觀す記

二山の間あひだに凹くぼまつた尾根おしねノ平たひらから常念じやうねんヶ岳たけが、圓まるい肩かたを聳そびやかして居いるのが天鬼てんきの鍛きたえた兜かぶとを伏ふせて、萬山まんざんの鎮ちんとしてゐるやうで、ツバクラ岳たけ二ノ俣またの天照てんしやう大天井おほてんせう岳たけも、鋭すどい尖先きさきを磨みがいて立つてゐる、土人どじんに聞きくと、槍ヶ岳やぶたけもこゝから見みえるともいふが、多た分ぶん常念じやうねんを槍やぶと見誤みあやまつてゐるのであらう、これらの諸山しよざんは、いづれも獨特どくとくの鋒先ほさきを、大虚だいきこの粗砥あらとに寄よせかけて、亂雲らんうんの水みづを流なが

本日アプルス嶺を觀す記

しては、注そいで、落日らんじつの火ひを燃もやしては、照てらし、ては、朝あさに夕ゆふに、新あらたなる燒刃やきばの匂におひに、天あまつ香かの醉ゑゑるが如ごとくであるといふことを聞きいて、こゝまで來きて見みたが、信飛しんひ地方ちゆうほうに特とく有いうな熱烈ねつれつ奇恠きかいの雲くもの大塊たいくわいは、寒水かんすい石せきの大城廓たいじやうかく削けつり成なす三萬尺まんじやく常念じやうねんヶ岳たけも、大天井おほてんせう岳たけも、茫々ぼうぼう無涯むがの白しろい幕まくに張はり、めぐらされて、見みえない、この雲くもの出でるのも宜むべなる哉かな、昨夜かんな半二時はんじから四時じまでの間あひだに、降ふつた雨あめ